

## クラティとカーリー：

階層的な合目的性の袋小路と、動く身体が繋ぐ考えられない系列

内山田 康

### サンスクリット化という記述概念の問題

2005年3月。私はある研究会で、社会的には主流ではなく周縁的、文化的には正統的ヒンドゥーではなく部族的だと考えられてきたケーララ南部の平地から低丘陵地にかけて居住する旧不可触民クラヴァの宗教実践の変容について発表した。クラヴァが祀ってきた神々と祖霊の神殿が、近年になってヒンドゥーの有力者たちが管理する寺院に変容していた。クラヴァだけが交流できた部族的な荒々しい神々は性格を変え、有力者たちに雇われた祭司が仲介するようになり、いくつかのクラヴァヴァの神を祀った寺院は経済的に栄えていた。しかし、多くのクラヴァたちはそこから除外されていた。ブラーマンの祭司との禁断の関係の末に自害したクラティ（クラヴァの女）が、カーリー女神として生まれ変わったという物語が伝わるパーヴンヴァカーリー寺院では、政治的な力を持った有力者たちが、寺委員会を組織して土地の所有権を手に入れ、この寺院を管理するようになったこと、また、カーリーが恐ろしさと気味悪さを失い、「ブラーマンの女性のような」と私の友人が形容する、白く美しい顔をしたバッドゥラカーリーに変貌したことを私は話した。一人の人類学者が、その現象はサンスクリタイゼーションで考えることができるのではないかと質問した。私は即座に（それでは私にとって研究する意味が無くなってしまうというニュアンスを込めて）「サンスクリタイゼーションでは面白くない」と答えた。いくつか質疑応答があり、また別の人類学者が、それはサンスクリタイゼーションやモダナイゼーションで考えることができるのではないかと質問した。私は規定のパターンを対象に読み取ろうとする発想は複製的で面白くないと思うと同時に、サンスクリット化あるいは近代化の合目的性の枠組みで考える慣習が根強いことを確認させられた。

その時、1952年の著作で「サンスクリット化」の概念を使ったM・N・スリニヴァスも、権力と知と生について我々に考えさせたM・フーコーもG・ドゥ

ルーズもすでに亡くなり、冷戦が終わった後も F・フクヤマが言うようにアメリカ民主主義の勝利で歴史が終わることはなく、イラク戦争は 3 年目に入ろうとしていた。インドのケーララでは、1991 年に始まった経済自由化の効果が 1990 年代の終わり頃から人びとにもはっきりと経験されはじめ、IT 産業で働く人たちの給料は公務員の何倍にもなり、携帯電話が急速に普及し、水田は違法に埋め立てられて宅地やゴム園に姿を変え、ショッピングモールが地方にも作られ、ホンダやバジャージのオートバイが道に溢れ、人びとは家で行っていたプージャーと相互的に関係していた場所性と時間性とそれに関わる感覚と知識を急速に失ってゆき、祖先祭祀やプージャーはブラーマンの祭司に外注するようになり、星占いは低カーストのカニヤンではなく、高カーストのスペシャリストが行うコンピュータ化された星占いに切り替え、多くのリネージ寺院が没落する一方で、新しい金持ちのリネージ寺院と時流に乗った経営をするヒンドゥー寺院は栄え、建て替えられた寺院の神像は金で覆われ、神の旗を掲げるための高価な柱が競うようにして立てられていた。また、このような傾向は、ヒンドゥー教徒の間だけに留まらず教会でも旗を掲げるためのりっぱな柱を立てることが流行り始めていた。さらには、祖先を送るための新しい聖地がヒンドゥー主義の団体によって川辺りに作られていた。このような時に、サンスクリット化や近代化の記述概念を、身の回りで起こりつつあるこのような現象に適用することで何が理解できるのか。これと引き換えに何かが考えられなくなっているのではないか。

サンスクリット化や近代化という外部の物差しを使った分析は、ある特定の指向性を持った批判的な思考を停止させると私は考えていた。サンスクリット化では理想的なブラーマンという想像されたヒンドゥー社会のヴェーダ的で階層的な基準が、また近代化では進化の頂点に立つと想定された欧米の特定の制度が基準として前もって含意されている。スリニヴァスのサンスクリット化の議論は、社会変化の中で社会流動（特に社会上昇）はどのようにして起こるかという関心に結びついている [Srinivas 1952, 1966]。サンスクリット化と呼ばれる変化の指標をいくつか挙げておこう。非サンスクリット的な儀礼を行って来た低カーストは、経済的な上昇を果たすと、儀礼をサンスクリット的なものに改め、ヴァルナの階層を基準にしたより高い儀礼的な地位を手に入れようとする。この過程において、低いヴァルナに属すると考えられている非サンスクリット的な儀礼や生活習慣は改められ、サンスクリット的な儀礼と高カース

トを真似た生活習慣が新たに取り入れられる。こうして狭い地域に限定的な部族的な神々は、地域を超越する汎ヒンドゥー的でサンスクリットの神々の体系の中に取り込まれて変容する。肉食、酒飲、血の供犠、神と人の部族的な名称は、菜食、禁酒、菜食の供物、サンスクリットの名称に置き換えられ、部族や低カーストの祭司ではなくブラーマンの祭司がプージャーを司るようになる。サンスクリット化の議論は特定の関心事を出発点としている。宗教実践は、特定の地域にだけに限定された非サンスクリットの小伝統と、汎インド的でより普遍的なサンスクリットの大伝統の二つに分類されている。非サンスクリットの小伝統がサンスクリットの大伝統に統合されて行く過程で、ミクロ的には様々なニュアンスが観察されるが、マクロ的には普遍的な大伝統の中に地域的な小伝統が取り込まれて変容するというシナリオだ。

私の民族誌的ケースを、前もって与えられたサンスクリット化と近代化の枠組みに組み込むことは難しくない。私のインフォーマントの中には、社会上昇を果たすために儀礼のサンスクリット化と教育の近代化を伴うカースト改革運動に関わる人びともいた。だからなおさらのこと、サンスクリット化と近代化（あるいはスリニヴァスが問題にした西洋化）の目的論的な問題意識のトポロジーに沿って民族誌を記述し、そのような記述に前もって胚胎させられた記述概念を使って誰がどの程度サンスクリット化していると「分析」することは、トートロジー的ではあるが、一般的に受け入れられた方法だ。しかし、これは私のプロジェクトではない。スリニヴァス自身が認めていたように、この記述概念を使った分析の限界は、問題とする社会流動（そして社会上昇）が、特定の構造が理念として不変であることを前提とする点だ。人びとは複雑な実践の痕跡を残しながら生きている。社会流動に還元できないこのような生を、サンスクリット化の概念で説明することは不可能だ。スリニヴァスは、長期的にはサンスクリット化の方向性とは対立する西洋化の概念を導入して、議論の行方を混沌とさせている [Srinivas 1996: 101]。これによってサンスクリット化の議論に微妙なニュアンスが加えられたというよりも、サンスクリット化では社会変容の性格が説明できないことが示されているとは考えられないか。こうしてスリニヴァスが何度もパラフレーズしたサンスクリット化の議論は袋小路の中で終わっている。

サンスクリット化の記述概念は、フロイトが発見した無意識に譬えることができる非合理的で非倫理的な周縁化したもの・ことを問題として取り組むこと

を始めから想定していない。また、社会構造自体の流動性についても分析的ではないから、この記述的な概念を使った分析は、本質的には分析ではない<sup>1)</sup>。閉じられた古代のヴァルナの階層的観念を基礎にしたサンスクリット化の記述概念や、植民地時代のイギリスや冷戦時代のアメリカを暗に参照した近代化と西洋化の枠組みを使って、狭くは社会流動を、広くは社会変容を理解しようとするこの試みは、(サンスクリット化や近代化の)程度の問題については議論できるだろうが、日常の生の中に隠れていて時折出現するその動きの痕跡を通して、間接的にあるいは直感的に知ることができる質的に異なる飛躍の可能性については考えることができない。サンスクリット化と近代化の概念を使って社会現象を記述することは、正統的ではあるがこのような合目的性を前提としているという意味において同語反復的だ。人類学の営みはそれ自身の限界を超え出る可能性を持つから面白いのではないか。そのような面白い仕事によって、我々が世界を知るために持っている限られた認識手段は拡張するチャンスを持っているのではないか。

私は以下において、方法論的な仕事を担わされた幾つかの民族誌的な記述を織りまぜながら、他者と自己を同時に理解することを目指したより自由度の高い認識の方法を素描することを試みよう<sup>2)</sup>。また、ドゥルーズを経由したアンリ・ベルグソンの生命と持続の思考に導かれて、超越的な根拠に頼らない内在的な思考の可能性を考えつつ、サンスクリット化や近代化の発想では考えられない部分に光を当てることを試みよう。

## 複数の思考が思考する

2005年8月。日曜日の朝、私は近所に住む友人レグのオートバイの後ろに乗ってヌーラナードゥの安ホテルから、数キロ離れた辻に住む「ポーティ先生」と呼ばれるブラーマンの元教師の家に出かけた。私は、その日クラヴァの集회가

---

<sup>1</sup> サンスクリット化の概念は、近代化、世俗化、グローバリゼーションの諸概念と同様に、それを繰り返し引用することによって対象の内実には光をあてるより、その対象の中で何が起きているかについて考えることを閉ざし、毛布を被せるように対象の中身を覆ってしまう危険性を持っている。スリニヴァスは時代と地域の違いによる差異を認めながらも、サンスクリット化の基礎は紀元前のヴェーダ時代に成立したヴァルナ制度にあるという。ヴァルナ制度は2500年以上も前に完成しているとされ、サンスクリット化の議論はこの信仰告白的な部分を議論しない [Srinivas 1966: 1-45]。

<sup>2</sup> その自由は、逮捕された後も自由度の高い生活を送ることができたフランツ・カフカ『審判』の主人公Kの自由、すなわち永遠に延期された審判という制約の中で無実を証明するための自発的な試みが初めて可能になっている逆説的な自由の状況に必然的に似ている [Kafka 1937]。その状況は、中央集権的な官僚機構の図式転写システム [内山田 2003] に図式を転写させない限りにおいて自由だと言えるだろう。

近くであるから一緒に行こうとポーティ先生に誘われていた。ポーティ先生の家から、クラヴァの集会が行われる元教員ゴーパーラン先生の家は近かったので、私はそこまで三人で歩いて行くものだと思っていた。しかし、ポーティ先生は、タクシーで行きましょうと言って譲らない。しかたなくタクシーに乗ってゴーパーラン先生の家に向かった。辻から少し離れたゴーパーラン先生の建築中の家の近くでタクシーが止まった。真っ白な長袖のシャツに真っ白なムンドゥを着たポーティ先生は、タクシーを降りるとタクシーの運転手に待つように言った後、ゆったりと歩きはじめた。集まっていたクラヴァの群れの中からゴーパーラン先生が数名のクラヴァの長老たちを引き連れて急ぎ足でやって来てまずポーティ先生、次に私とレグを出迎えた。一人のクラヴァが傘を差してポーティ先生に日差しが当たらないようにした。ゴーパーラン先生も、真っ白な長袖のシャツと真っ白なムンドゥを着ていたが、色が黒く痩せた彼と、恰幅が良くて一人だけ差し出された傘の下に立ったポーティ先生の間には繰り広げられた身振りが表現した象徴的な階層関係は、土地改革前の高カーストの地主と低カーストの使用人の関係を彷彿とさせるものだった。

ゴーパーラン先生の家は庭は、日除けの青いビニールシートで覆われていて、奥の方にはテーブルとマイクが置かれていた。正面のテーブルの手前には沢山のプラスチック製の椅子が並べられていて、近所のクラヴァの男女が座って待っていた。ポーティ先生は、会場にいた主賓と挨拶をして、集まっていたクラヴァたちに短く祝辞を述べた後、待たせていたタクシーに乗って去っていった<sup>3)</sup>。無神論者で妻と二人だけで住んでいるポーティ先生は、家で会うとブラーマンらしさが見えなかったが、クラヴァの集会では、タクシーに乗って来たブラーマンと徒歩で来た不可触民の間で、また関係的な身振りと関係的な言葉を通して、古いカースト間関係が人びとの前で演じられた。知覚できる媒介が関係的な階層性を帯びさせられていた。

その日の主賓は、クラヴァの社会上昇を目的としたカースト改革運動をしているソーシャルワーカーで「ブラック・フォース」の編集長をしているタンガッパンだった。彼は、色が白く、背が高く、身のこなしが洗練されていて、集

---

<sup>3)</sup> ポーティ先生はその後、タクシーでどこかへ出かけた後、家に戻り、我々が戻って来るまで運転手を待たせていたので、私が料金を払った。ポーティ先生は私にタクシーを使わせることで、クラヴァたちの前で、ブラーマンらしく振る舞うことができただけでなく、その後ただでタクシーを使ってどこかへ出かけることも出来た。歩いて行こうとか、オートリキシャで行こうと言っても、タクシーで行こうと言った理由は後になって分かった。レグはポーティ先生のずる賢さに感心していた。

まっていた近所のクラヴァたちとは、別の世界に住む人だった。タンガッパンの妻は元国会議員、娘は医者、息子はIT技術者としてロンドンで働いているという。私は促されるままマイクに向かって祝辞を述べた後、ゴーパーラン先生に後日会いに来る約束をして暇乞いをした。集会の会場を後にして待っていたタクシーに向かって歩き始めると、「あの本は皆購入したか。購入していない人は今すぐに購入しなさい。」とタンガッパンが聴衆に向かって演説する声がサウンドシステムに拡大されて聞こえた。

あの本とは、不可触民のクラヴァをより高貴なシッダナールというカーストに変革するカースト改革運動について書かれた様々な短い文章を集めた冊子と、シッダナールの神話的な歴史について書かれた本のことだ。読者はカースト改革運動を進める目的で書かれた冊子から、生活をサンスクリット化することを勧められ、シッダナールの新しい神話から、自分たちが高貴な歴史を持っていることを学習する。シッダナールのカースト改革運動の表面を見る限り、スリニヴァスがサンスクリット化の議論で説明したのと同じことが起こっているように見える。しかし、ウィトゲンシュタインのやり方を模倣して様々な裏道を隈無く歩くようなオープンな態度でクラヴァたちが日常の中で選択を迫られる分岐点に接近すると、サンスクリット化の方向へは向かわない迷った軌跡に出会うだろう。

集会が始まる少し前、私がゴーパーラン先生に、死後7回目の夜に行う「チャーヴ・トゥッラル」（死者が跳ねる）と呼ばれる降霊会について尋ねると、先生は途端に雄弁になって、自分たちだけが持っている霊的な力や関係について誇らしく語り始めた<sup>4)</sup>。ゴーパーラン先生が誇らしく語ったチャーヴ・トゥッラルは、シッダナール協会が飲酒や供犠などと共に止めさせようとしていた好ましくない慣習の一つだった。シッダナール協会の集会を開くために自宅を会場として提供したゴーパーラン先生は、協会の運動について説明を始めるとすぐに脱線して、シッダナール協会が止めさせようとしている非サンスクリット的で部族的な儀礼やクラヴァの祖先やクラヴァの神々が持つ尋常ではない力について誇りを持って話すのだった。ゴーパーラン先生は修士号を持っていた。長女は博士課程で生物工学を専攻していた。高学歴で長く教員をして尊敬されていたゴーパーラン先生は、おそらくこうした理由で、シッダナール協会主催の集会のホストとなり、彼の家はクラヴァのサンスクリット化と近代化を推進

<sup>4)</sup> チャーヴ・トゥッラルについては拙稿「沈黙する死者：降霊術師とケーララのモダニティ」（内山田 2008）を参照。

するカースト改革運動の会場になっていたのだろう。しかし、ゴーパーラン先生は、沈黙するタンガッパンにはお構いなしに、会場を訪れた私に向かってクラヴァの部族的な儀礼や慣習について誇らしげに話した。その数日後も、その一年後に訪れた時も、ゴーパーラン先生はクラヴァだけが持つ呪術的な力について熱っぽく話した。ゴーパーラン先生が、シッダナル協会の改革運動を首尾一貫して支持しているとは思えない。若い世代の中には、クラヴァの宗教的な実践と共約することが難しいより一般的な政治的な概念を使って、クラヴァが置かれた状況について話す人たちもいた。

ゴーパーラン先生よりも二十歳ほど若い三十代後半のジャヤプートランは、チャーヴ・トゥッラルを含むクラヴァの祖先祭祀に対しては否定的な見解を持っていた。彼はクラヴァの地位向上を目指す政治運動をするソーシャルワーカーで、死者を家の南側に土葬することや、死者の霊を呼び戻してチャーヴ・トゥッラルをすることには反対していた。ジャヤプートランは、祖先祭祀は止めるべきだと考えていた。しかし、「でもあれはわたしたちの祖先だろう？」と年寄りに言われると困るとも言った。また、2005年8月13日未明に亡くなったポディアンの葬儀に来ていた親族の大学生の若者は、大学で「君たちはチャーヴ・トゥッラルやるんだって？」と聞かれて恥ずかしいと言った。8月19日の深夜から20日未明にかけて行われたポディアンのチャーヴ・トゥッラルにこの大学生は参加しないだろうと私は予想していた。チャーヴ・トゥッラルが始まると、彼は遠くからプラーティがポディアンに呼びかけるのを見ていたが、数時間後、ポディアンが次女に憑依して「子供たち、お前たちの顔が見たい」と言った時には、彼はポディアンになった次女の近くに座っていた。そして自分の順番が来ると、彼はポディアンの前に進み出て、死者と言葉を交わした。このように、その時になるまで、何が起こるか分からない出来事を私は何度も経験した。

私はチャーヴ・トゥッラルについてアラップラ郡とパティナンディッタ郡のクラヴァの居住地で尋ねてまわったが、クラヴァたちは、あれはもうやらなくなったと答えた。昼間にシッダナル協会の集会に出て、そこで都会から来たリーダーの話聞き、シッダナル協会によって出版されたシッダナルの歴史を読み、建て直されたクラヴァの寺院を見ると、サンスクリット化が起きていると思われるようなインデックスを数多く見出すことができる。しかし、岐路の前でどうしようか迷いながらも、卑しめられた部族的な儀礼が始まると、

そこに生じた何かの流れのようなものに引きつけられて参加してゆくクラヴァたちを見るうちに、私はこのような首尾一貫しない態度をサンスクリット化の過程の中の微細なニュアンスとして描くのではなく、サンスクリット化とは根本的に質の異なる何かが存在しているにも関わらず、それを理解できないことが問題だと考えるようになった。その何かうごめくものについて、民族誌的アネクトドを紹介しよう。

### 毛が逆立つ

2005年9月。私は、十数年前に15ヶ月間住んだナーガラージャナードゥの南西に広がるクラヴァが住む地域を訪れた。今ではシリア派キリスト教徒を始めとする非クラヴァの農地や屋敷の浸食が進んで、クラヴァが所有する土地は少なくなっただけだが、ここは今でもクラヴァが数多く住んでいる場所だ。私がここに住んで調査をしていた頃、昔の話をいろいろと教えてくれたチャンドランという老人がいた。私はチャンドランから、彼の祖父がそれまで住んでいた（今では教会とミッションスクールのある）パリムードゥの交差点の北側に住んでいたが、そこで暴力を受けて、この土地に走って逃げて来たと言った。森のこの部分はチャンドランの祖父の姻族が所有していた。チャンドランの一族が住む場所に隣接して住んでいた別のクラヴァのリニージは、オーチラの辺りから逃げて来たらしい。このリニージの祖先は、101体のスワルーパム（神像）を持って土地を求めてここにやって来た。彼は、森の主だったクラヴァの祭司に101のスワルーパムを差し出した。クラヴァの祭司はこれを森の中に埋めた後、上からひっくり返したブロンズの器を被せた。101のスワルーパムを受け取ったクラヴァの祭司の呪術的な力は強力になったという。それと引き換えに男は森の中の土地を得た。この森に始めから住んでいたクラヴァが何処から来たのかは不明だったが、ある時、クラヴァの老女が地面を指して「クラヴァはここから生えて来た」と教えてくれた。

クラヴァは死者を家の近くに土葬する。1992年のある日、私はクラヴァが家の近くの土地を耕しているのを見ていた。人骨が土の中から見えたので、それは何かと聞くと、クラヴァは手を休めて、ここにはじいさんを埋めた、少し離れた場所を指して、あそこにはばあさんを埋めたと言った。ヤムイモ、タロイモ、タピオカなどが成長するクラヴァの畑は、畑と区別されていない墓地でもあった。畑は死者と植物が混じった場所だということも出来るだろう。根茎類

を成長させているのは、このような場所の力だ。この森の主だったクラヴァは、このような性格の場所から生えて来た。クラヴァの土地には、シリア派キリスト教徒をはじめ、多くの非クラヴァが百年以上に涉って入って来ているので、ここが森だったことを想像することは難しい。しかし、カーヴと呼ばれるクラヴァの森の残余が、神と祖先が棲む場所、気まぐれな霊がこの世とあの世の間を行ったり来たりする場所として僅かに残されている。森は死と生が混沌とした力を持つ所だ。2000年前の古代タミルのプラーナーに描かれた世界では、死体は不可触民の手によって町から森へ運ばれた。死の際に生命力は制御不能になる。不可触民の仕事はこの制御不能になった危険な力を森で制御することだった [Hart 1975]。

チャンドランの家の近くには「宮殿」(コッターラム)と呼ばれる祖先の家があった。その宮殿は空っぽで、神の像も、神の絵も、祭壇も何も無かったが、そこでヤシ酒、平たく潰した米、ビンロウとキンマを用意すると、祖先たちが飲食するためにやってきたという。私は1993年カルキダカム月(7-8月)の新月の朝、この祖先の宮殿で行われたプージャーに出たことがある。プージャーを司ったラーマンも長老として参加していたチャンドランもそれぞれ2002年と1997年に相次いで亡くなっていたので、祖先祭祀が出来る人はいるのだろうかとは考えていた。宮殿に着くとチャンドランの娘クッティーが私を見つけてやって来た。「夢でお前を見た、アイヨー、神さまー」と彼女は言った<sup>5)</sup>。宮殿の壁にはカレンダーアートからコピーしたらしい、頭に巻かれた髪の毛からガンジス河を吹き出し、首にはコブラを巻いた青い肌のシヴァ、オームの文字、ギーを舐める赤ん坊クリシュナの絵が描かれ、宮殿に上がる階段には、パーヴァンヴァにあるクラヴァのカーリーを祀った神殿の破風に描かれていたのと同じ

---

<sup>5)</sup> 1998年に亡くなった彼女の母チャッキーは、私が昔住んでいた家の家主の処で働いていたことがある。娘のクッティーはその関係を頼って、私が間借りしていた家に何度か姿を現した。家族が病気になってもお金が無く病院に連れて行けなかった時と息子が火薬の事故で死んだ時に、そのような時に使用人を助ける義務のある主人に助けを求めると、クッティーはめそめそ泣きながら私に援助を乞うた。「夢でお前を見た、アイヨー、神さまー」と言ったのはそのようなことが昔あったからだ。その時、私はただ一方的に教えてもらっただけで、結局何も返さないうちに亡くなったチャンドランに借りがあったから、クッティーには100ルピーを手渡した。2007年にクラヴァの宮殿を尋ねた時も、クッティーは「夢でお前を見た、アイヨー、神さまー」と同じことを言った。クッティーが物欲しげにじっと見ていたので、私は無視して行ってしまふことができず、帰るために乗りかけたオート三輪を降りて100ルピーを手渡した。価値が低下した紙幣を手にしてクッティーは嬉しそうではなかった。1992-93年頃の農業労働者の日当は、男性が50ルピー、女性が30ルピーだった。それが今では男性労働者の日当は200-250ルピーになっていた。女性でも100ルピー以上稼ぐだろう。

カーリーの恐ろしい顔が描かれていた。装飾がないことが特徴的だった祖先のための空の家に、カレンダーアートのコピーがにぎにぎしく描かれていた。

この「寺」を所有しているという勤め人らしい男が話しかけて来た。彼はインド宇宙研究機構に勤務するこの土地を所有する一家の長男だという。私は1992年から93年にかけてこの近くに住んでいたが、彼を見るのは初めてだった。彼がプージャーをやってやろうかというので、私はやってくれと頼んだ。へたくそなカレンダーアートのコピー同様、彼の身のこなしには何も特別なことはなく、マッチでランプに火をつけてその火を私のところに持って来ただけだった。マントラを唱えることも、祖先を呼ぶことも、見えない神々と会話することもなかった。亡くなったラーマンやチャンドランは、沢山の昔話を知っていただけでなく、彼らだけしか知らないマントラを知っていたし、非クラヴァの人びとが怖がる女神マルダーを家畜のように手なずける方法も知っていた。それに比べると、この男はクラヴァの宮殿で霊と人をどのように媒介したらよいのか知らないようだった。彼はこの寺には何も無いからちゃんとしたシヴァの寺にすると断った。そして誰でも知っているようなありきたりの説明を続けた。私が退屈な話を我慢して聞いていると、彼の兄がやってきた。ここではチャーヴ・トゥッラルをやるのかと聞くと、彼はうーむと言って黙ってしまった。彼の両方の腕には鳥肌が立っていた。チャーヴ・トゥッラルはやっていると言った。本物の長兄の毛は逆立っている。レグがこれはなんだと聞くと、彼は「寒い」と言った。私はレグに目で合図した。レグもこれは面白いと思っているのが分かった。

その数日前の午後の遅い時間、私とレグはヌーラナードゥの粗末な茶店でお茶を飲んでいて、そこにいたモーハナンというクラヴァの井戸掘り人夫がチャーヴ・トゥッラルについて次のようなことを言った。

時代は変わった。生活のスタイルも変わった。以前は小さな鐘と米粒さえあれば、祖先は走ってやってきた。しかし、今ではそんな信仰はなくなった。以前だったら、こんなことを話ただけで、それを感じて毛が逆立ったよ。今では何も感じない。信仰は消えてしまった。そんなことはもう何の役にも立たない。

小さな鐘と米粒は、プラーティが死者の霊を呼ぶのに使う時に使う道具だ。モーハナンによれば、今では祖先は呼んでもやってこない。チャーヴ・トゥッラ

ルの信仰は消えた。毛はもう逆立たないというモーハナンの話、クラヴァの祖先の宮殿の壁に描かれたカレンダーアートのコピー、インド宇宙研究機構に勤務する「長男」による「寺院」の再興計画、これらは全て、スリニヴァスのサンスクリット化と西洋化の議論を支持するよう見える。しかし、自称長男の誰でも知っているありきたりの一般的な説明を聞いていた時にやって来た本物の長兄は沈黙していたが、腕の毛が逆立っていた。彼は公務員の自称長男の勤め人がおそらく感じていない何かの流れと前言語的な部分で交流しているようだった。ここに垣間見えた経験について、宮殿の壁に描かれたヒンドゥーの神々のイメージと床に置かれたヒンドゥーの小道具の配置を E・パノフスキー流に図像分析しても表象でない部分は明らかにならない。図像学や解釈学は毛を逆立てる流れのような何かを捉えきれない。捉えようのない何かがこの辺りを流れている。気が向いてそれがやって来たならここで休み、またどこかに去って行けるように空っぽの宮殿は作られている。ヒンドゥーの神々の図像が描かれても、図像化され得ないこのような存在の流れを感じる人たちがいる。サンスクリット化の記述概念は、この場所が持つモーハナンが毛が逆立つと表現した何かの働きを記述する能力を持ちあわせていない。

### パーヴンヴァのカーリー

ケララ南部のパーヴンヴァという小さな村に、非業の死を遂げた若いクラティが、カーリーとして蘇り、愛と呪いの神として祀られた寺院がある。パーヴンヴァカーリーとして知られるこの女神を祀った寺院は、1990年代の終わりに訴訟の末パーヴンヴァの有力他たちが支配する寺委員会による所有が認められ、パーヴンヴァカーリーと縁のあるブラーマンの祭司は追放され、パーヴンヴァカーリーと繋がりのあるクラヴァたちも女神の神殿で持っていた権利を失った。私が初めてパーヴンヴァカーリー寺院を訪れた1996年には、この大きな変化は始まっていたが、追放されたブラーマンの祭司と、クラヴァの乞食たちはまだそこにいた。2004年と2005年に調査を行った時、パーヴンヴァカーリー寺院は、普通のヒンドゥー寺院になっていた。大学で商学を学んだが良い就職口が無く、パーヴンヴァカーリー寺院に事務員として雇われたクラヴァのソーマンによれば、彼が子供だった30年前、この場所はカーヴだったという。ソーマンは牛に草を食べさせるために、此処へ良く牛を連れて来た。カーヴの中にはカーリーを鎮座させた石があっただけだという。

カーヴの中のカーリーを祀った石が、ヒンドゥー寺院に変化していった。この変化をインド人類学の慣例に習ってサンスクリット化の概念を使って記述すると、サンスクリット化の様相とその度合いについて明らかにすることができるだろう。私は、この変容の過程から、サンスクリット化に当てはまる指標を切り取って、ここでもまたサンスクリット化が起こっていると、その一般性と合目的性を追認することはしない。そうすることは、支配カーストがパーヴンヴァでしていることと同じこと、すなわち（女神との血の繋がりを通して特別な権利を持っていた）クラヴァの一族と（女神の愛人だったブラーマンの家に婿として入ったことで女神と特別な関係を持っていた）ブラーマンの一族が担ってきた女神の生きた物語と、その生きた物語を通して経験される死と不可分の生命力の表出を、寺にまつわる昔話にしてしまう。制御が難しい荒ぶる生命力を表象によって象徴させてしまう。サンスクリット化の合目的的ロジックの中では、この縁起は非サンスクリット的な小伝統の一つとして位置づけられ、その生命的な感覚の内的ロジックには関心が持たれない。パーヴンヴァの有力者たちがこの両者の働きを排除して宗教法人を作った出来事でさえも、サンスクリット化として読み解かれてしまう。寺委員会は、パーヴンヴァカーリーとその愛人に縁のあるクラヴァとナンブディリブラーマンをカーリーが鎮座した場所から追放して、この両者とは関係のないブラーマンの祭司を雇用して出来事の固有性を持たないプージャーを司らせている。サンスクリット化と近代化の記述概念を使うのが当たり前にも見えるこの事例を、地域的な小伝統が普遍的な大伝統に統合されて行く一般的な合目的性の問題としてではなく、小伝統の中だけでなく大伝統の中にも等しく存在する異なる性質の問題として、すなわち、人の死に際して制御不能になるために秩序を守るために人里から森に捨てられたアナーキーな荒ぶる力の表出に関わるものとしてオープンに追求してみよう。

1992-93年、私はパーヴンヴァカーリーの話聞いたことがあった。近所に住んでいたナーヤルの女性が20数年前に嫁いできた時、彼女は霊に取り憑かれるようになった。彼女はパーヴンヴァの親族の死霊が取り憑いたと思っていた。この死霊は出産の時に死んだ若い女性だという。占星術師や祈祷師が呼ばれて悪霊を祓うことが試みられたが、うまく行かなかった。夫の親族が悪霊を追いつくために女性を叩いたが、霊は出て行かなかった。女性は20年ほど正体が判らない霊の憑依に苦しんだ。ある時、この家族に悪意を抱く者がパーヴンヴァ

カーリーに祈願して、一家を苦しめていたことが判明した。親族がパーヴンヴァに赴き、カーリーに鶏の生け贄を捧げると、彼女は憑依しなくなった。しかし、長期間の憑依は、この一家を経済的に疲弊させ、夫は土地をキリスト教徒に売らなければならなかった。彼女に憑依したのは親族の若い女性の死霊だと思ったという女性の話を除いて、私は彼女の夫から、妻と家庭を苦しめたパーヴンヴァカーリーの憑依について聞いた。1996年に再訪調査をした際、私はこのナーヤルの一家の隣に住むレグと母親のタンガンマから、これとは全く違う話を聞いた。私はこの時、レグの家の下宿していた。

このナーヤルの女性は、嫁いできてすぐに夫と同じタラヴァード（母系親族の大家族および家）のある男性と性的な関係を持つようになった。この男性の家がレグの家の近くにあったので、タンガンマは二人の逢引きを知るようになった。夫は妻の不倫を察して妻を追及した。（このナーヤルの家は隣なので、夫が妻を責める様子をタンガンマは聞く機会があったのだろう。）夫が妻の不倫を激しくなじる度に、彼女に正体不明の霊が憑依した。二人の関係は長男が成人するまで続いたが、ある日、長男が家の外で不倫はやめろと母親を叱りつけたことがあった。（タンガンマはこれを聞いていたのだろう。不倫の相手の男とその家族にもこの騒動は聞こえたと想像される。）この出来事の後、女性は夫の親族との逢引きを止めた。それ以来、彼女は憑依しなくなった。以下で述べるように、パーヴンヴァカーリーは（不倫の）恋愛の女神でもある。私はパーヴンヴァカーリーについて調べるにつれて、夫が妻の不倫を激しく追及する度に妻が憑依したのは、夫の追及を逃れるために妻がパーヴンヴァカーリーの庇護を求めたのが憑依となって現象したのではないかと考えるようになった。パーヴンヴァカーリーは秩序を転倒させる性格を持っている。女神のこのような性格故に、悩みを抱える人びと、特に女性たちがパーヴンヴァカーリーに願掛けにやってくる。その中にはイスラーム教徒やキリスト教徒もいる。

### 常識的な時計回りが構造化するダルマ

1996年、私はレグの父で物知りのタンガッパンに、この辺りで不可触民の女性が非業の死を遂げて女神に生まれ変わって祀られている寺を知らないかと聞くと、パーヴンヴァカーリーがそうだということで、さっそくレグとパーヴンヴァに出かけた。カーリーを祀った小さな神殿は北を向いていた。その時の写真がないので定かではないが、私もレグもカーリーが恐ろしい顔をしていたことと

記憶している。カーリーに仕えていたのは低カーストのイーラヴァの祭司だった。カーリーの神殿の西側にシヴァとパールヴァティーの神殿が東を向いて並んでいた。その後方には二人の子供であるガナパティの神殿があり、そちらには若いブラーマンの祭司がいた。二つの象徴的な空間に分割された人影がまばらな境内のカーリーの神殿の近くで、老女が物乞いをしていた。低カーストらしく見える 30 代の男が、カーリーに願掛けをしていた。男は黒い鶏を捧げて、もしも家を出た妻が帰って来たら 501 ルピーを奉納するという約束をして帰っていった。私は老女にカーリーの物語を知っているかと聞いてみた。彼女は知らないと言った。彼女はカランビという 86 歳のクラティだった。私がタンガッパン、イーラヴァの祭司、パーヴンヴァで会った人びとから聞いたカーリーの物語はおおよそ次のようなものだ。

昔、ここは深い森だった。不可触性の時代のことだ。森の中にはシヴァ寺があり、ブラーマンの祭司がいた。一人の美しいクラティがいた。彼女の肌は金色をしていた。クラティとブラーマンは愛し合い、クラティは妊娠した。パーヴンヴァの人びとはこれを知って怒り、二人を殺しに来た。

この後の展開は二つに分かれる。クラティの愛人だったブラーマンと縁のあるブラーマンの一族の祭司によれば、

パーヴンヴァの人びとは、二人を殺した。

これはダルマを犯した二人が、ダルマを守る人びとによって殺されたという語りだ。他方、クラティと血のつながりがあるクラヴァたちによると、

クラティは森に逃げて、鎌で首を切って自害した。

このヴァージョンでは、支配カーストにとって危険な自律性を彼女は最後まで保持している。

穢されたシヴァ寺は廃寺となり、森に覆われた。人びとはここに近づかなかった。この地方は病魔に襲われた。この森には病を癒す力があると信じられるようにな

った。ある日、近くの村に住む二人の女が供物を持ってパーヴンヴァの森に入った。一人の女が憑依して「ここに座る」と言った。人びとは、そこに石を据えて、プージャーを行った。

私が始めて訪れた頃のパーヴンヴァカーリー寺院に戻ろう。この頃、パーヴンヴァカーリー寺院は、この土地を以前から所有していた大地主だったブラーマンの一族が所有権を失い、有力者たちが支配する寺委員会が、このブラーマンの一族を排除して、新しい寺院の建設を始めていた。排除されたブラーマンの一族は、これを不服としてコッラム地方裁判所で訴訟を起こしたのが1996年だった。私がレグと初めてパーヴンヴァカーリー寺院を訪れたのは、このような時期だ。以下において寺院の空間を象徴的に理解した後、境内を歩く参拝者たちの時計回りの動きが常識化しているサンスクリット的な構造を構造化させていることについて述べよう。

先にも述べたように、私は、パーヴンヴァカーリーの縁起をイーラヴァの祭司に聞いた。すると彼は、パーヴンヴァの物語を大まかに話した後、次のように続けた。何年前か前、あなたと同じようにパーヴンヴァカーリーの物語を聞くために大学から劇作家が尋ねて来た。その人はマラヤーラムの教授だった。しかし、誰もパーヴンヴァカーリーの物語を上演することはできない。カーリーが役者に憑依して、劇が続けられなくなるからだ。パーヴンヴァカーリーの物語は、文字に書き留めることができない。この文化ロジックについて少し補足しておこう。

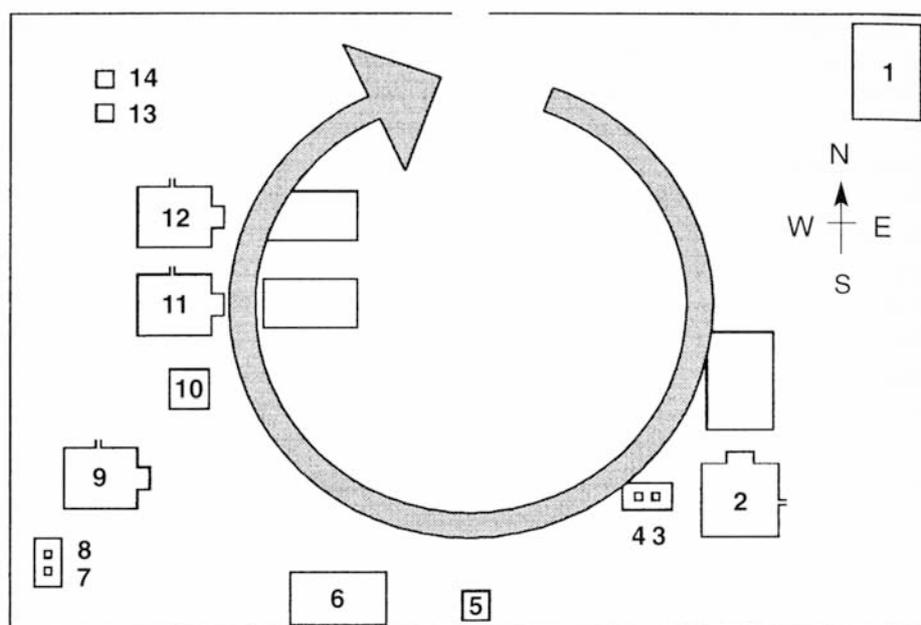
フィールドワークを始めて2年目の1993年、ナーガラージャナードゥとその隣のパッリムードの南に広がるクラヴァが土地を失っていた地域で、私はクラヴァの祭司ラーマンに、マルターについて聞いたことがある。マルターは天然痘の女神だから、昔はとても恐れられていた。当時、私は長老のチャンドランから、クラヴァがマルターをクラヴァのテリトリーの中のカーヴ（神や祖霊が棲む茂み）に食べ物でおびき寄せて手なづけ、牛でも扱うように首に縄をつけて村の中を歩き回り、カーヴの中の木に結びつけると聞いた。そのことをラーマンに確かめると、そうだ、マルターに綱をつけて連れ回すという。本当にマルターを木に縛り付けることができるのか、と私が聞くと、ラーマンは、「あれはマーヤー（幻）じゃないか」と答えた。それは、あれは幻じゃないか、だから捕まえることなどできない、そうだろう、という意味だ。

クラヴァは、恐ろしい力、手に負えない力を持った天然痘の女神マルターを家畜のように飼いならす力を持っている。クラヴァは手なずけたマルターをペットのように連れて歩く。チャンドランは、クラヴァの力について話す時、楽しげだった。夜には、クラヴァの土地の中にあるカーヴにマルターを結びつけておく。カーヴの近くに家を建てたよそ者たちは、怖くて夜眠ることも出来ない。チャンドランは、マルターがよそ者たちからクラヴァの土地から追い払ってくれると話した [Uchiyamada 2002]。(それはチャンドランの願望的思考だった。その後、よそ者たちはクラヴァの土地を様々な手段で手に入れて、支配を拡張して行った。)しかし、マルターは気まぐれな神だ。さらに、マルターは幻だ。クラヴァはそのような性質の力である神を縛り付けておくことはできない。「文化を持たない」未開のクラヴァは、恐ろしい天然痘の神を手なずける術を知っていたために、文化を持つ人びとに恐れられていたが、神のエージェンシーは、クラヴァがコントロールできるような性格のものではない。

パーヴンヴァカーリー寺院は、カーリーをもてなして、座わらせている場所だ。しかし、この気まぐれで、恐ろしい力であるカーリーをつなぎ止めておくことができるのか。脚本やフィールドノートに彼女の物語を記述することができるのか。人はカーリーの生涯を演じたり、その物語を書き留めることができない。カーリーはリアルであるが、幻でもある。カーリーは手なずけることができたと思っても、支配されることはない。カーリーを支配しようとするれば、我々が逆にカーリーに支配されてしまう。しかし、天然痘が撲滅された後、マルターは恐れられなくなってきたことも事実だ。

さて、パーヴンヴァカーリー寺院に来る参拝者たちは、北側の門、あるいは東側の門で履物を脱ぎ、カーリーの神殿(2)にやって来て、ランプに注ぐためのヤシ油や、美貌自慢の女神が喜ぶ腕輪などの贈り物を神殿に供える。事務所(1)に寄ってプージャのチケットを購入してからカーリーの神殿に来る人びとも多い。あるいは私がそうしたように、イーラヴァの司祭と話しをして特定のプージャを勧められ、事務所でチケットを買ってから神殿に戻ってくる者もいる。悩みを抱えてやって来た参拝者たちは、女神に繰り返し話しかけ、あるいは神殿の前の屋根付きの床の上に長い間じっと座っている。彼女たちは、カーリーの神殿からまっすぐ帰らない。それは、パーヴンヴァカーリー寺院の西半分には、ヴェーダ的な秩序ダルマを体現したシヴァとパールヴァティーの神殿があるからだ。参拝者は、長い時間座っていた床から立ち上がると、ヒンド

ウーの偉大な神シヴァを拝み、続いて神の側から見て左手に座るパールヴァティー（12）を拝む。シヴァのパールヴァティーの子供カネーシュ（10）とシヴァとヴィシュヌの子供シャスターヴ（9）の神殿に立ち寄る参拝者もいる。人々はシヴァとパールヴァティーのカップルとシヴァの子供たちが構成する秩序を慣習通りに時計回りの方向に回ってから北門から外に出る〔図1〕。



1 Temple Office 2 Pavumba-Kali 3 Kurava Ancestor 4 Brahman Ghost  
5 Well 6 Brahman Priest's shed 7 Nagaraja (Snake-King) 8 Nagayakshi  
(Snake-Queen) 9 Shastavu 10 Ganapati (Ganesh) 11 Shiva 12 Parvati  
13 Yakshi 14 Matan

図1. 参拝者の良識的な時計回りによって作られる階層構造  
(Uchiyamada 1999: 108)

参拝者たちは、神々の秩序とカーストの秩序に共通する常識（すなわち良識）に従って時計回りに右から左へ移動する。カーリーの神殿で長い時間を過ごしたとしても、シヴァとパールヴァティーを参拝することによって、カーリーが、この偉大な神々の守護神であるような象徴的構造を作ってしまう。母と呼ばれていても、子供を産む前に死んだクラティは、母になれなかった母だ。この母は、子供を従えて夫の左側に座るパールヴァティーとこの神格が作る構造化したダルマの下位に位置づけられてしまう。

## クラティの逆回り

1997年、モンスーン。その年、私は、再びレグと共に雨の降るパーヴンヴァを訪れた。カーリーの神殿の近くにはカランビがいた。暫くするとカランビは片足の無い年配のクラヴァの男と物乞いをしていた。私は北側の入口の傍らにあった菩提樹の下で二人のクラヴァの乞食のそばに座った。白いムンドゥと白い長袖のシャツを着た中年の男が妻と一緒にカーリーの神殿の前で女神を拝んでいた。二人はその後、時計回りに境内を回り、シヴァの神殿とパールヴァティーの神殿で手を合わせてから、北門から外へ出ようとして、私の前を通り過ぎた。何メートルか後ろを妻が続いて歩いていた。隣に座っていたクラヴァの乞食が「おい、行く前に何か出せ。おれは女神に縁がある者だ。」と男に対して強い語調で言った。

私は男がそのまま門から出て行くだろうと予想して見ていた。男が菩提樹の前をすでに通り過ぎて、門のすぐ近くまで来ていたからだ。しかし、男は魔法にかかったように立ち止まると、シャツの左のポケットを探りながらクラヴァの乞食が座っている所に戻って来て、5ルピー紙幣を手渡し、カランビにも紙幣を手渡してから帰って行った。二人の乞食はそこに座ったまま50パイサ、1ルピー、あるいは数ルピーを参拝者たちから受け取っていた。乞食がバスターミナルなどで受け取る金額は格段に少ない。乞食に声をかけられても無視する人の方が多い。乞食に声をかけられて金を出すために戻ってくるのはただ事ではない。クラヴァの乞食がクラヴァだった女神が祀られたこの場所で、女神との近さに由来する特別の力、あるいは女神に対する特別の権利を持っているからなのだろう。

正午になり、寺の事務所の扉は閉じられた。ブラーマンの祭司がシヴァの神殿の扉を閉じて、パールヴァティーの神殿の扉も閉じた。その後、祭司は南側の建物(6)に入り、長袖のシャツを着て、ムンドゥは足首の所まで下ろした姿で出て来た。彼は境内を南から北に横切って門から外に出て行った。これを合図にしたかのように、カランビは立ち上がり、ふらふらと歩き始めた(A)。カランビはパールヴァティーの神殿の前で立ち止まり、足を交叉させて神殿に向かって立ち、短く手を合わせると、ムンドゥの端を内側にたくし込んだ部分からコインを取り出して、パールヴァティーの神殿に置いた(B)。シヴァの神殿でも同じことやるだろうと思って見ていると、カランビはシヴァには目もくれず、ブラーマンの小屋に向かってよたよたと歩いて行った(C)。いつの間にか

ブラーマンの祭司は戻っていて、扉を開けると敷居のすぐ外に粥の入ったステンレスの容器が置いて扉を閉めた。カランビはステンレスの器を取り上げると、井戸 (5) まで行きそこで粥を食べて、容器を洗ってから元の場所に戻した (D)。その後カランビは、クラヴァの祖先が右に (3)、ブラーマンの死霊が左に (4) 座る、浄と不浄の秩序が転倒した祭壇に向かった。カランビは、常識に従えば、正面、すなわち北側から、二体の神が座る祭壇に近づくべきところを、後ろ側から近づき、祭壇の上に捧げられていた薫製したタバコの葉の束を無造作に掴み取った (E)。浄と不浄、高位と下位の秩序が転倒したクラヴァの祖霊とブラーマンの死霊のカップルが座る祭壇の背後に立ったカランビは、今度はカーリーの神殿の後ろ側を反時計回りに歩き、神殿の向かって左側から出て来た。その時カーリーの神殿の前では、イーラヴァの祭司がカーリーに向かって立っていた二人の女性にプラサーダム（神の食べ残し）を手渡していた。カランビは祭司と参拝者の間に割って入り、女神に背を向けたまま、手を突き出した (F)。一人が祭司から受け取ったばかりのバナナを一本差し出した。隣に立っていた女性も同じようにバナナを差し出した。カランビはバナナを受け取るとその場で食べた。私はカーリーの神殿の近くでこれを見ていたが、北門近くの菩提樹の台座に戻ってそこに座った。カランビはバナナを食べ終わると、タバコの葉の束を手に持ち、よろよろと北門の菩提樹 (A) に戻って来た [図 2]。

この間およそ 20 分。時間の境目を跨ぐ正午と正子（真昼の 12 時と深夜の 12 時）は、秩序が最も危険に晒される時間、憑依が最も起こり易いのもこの時間の境目だ。正午になり、ダルマ的秩序を体現したシヴァとパールヴァティーの夫婦の神殿は閉じられた。カーリーの神殿は開かれたままだった。秩序が危険に晒される時間に、このクラティはパールヴァティーを拝み、コインをその神殿に置いた。シヴァが存在しないかのようにその神殿を通り過ぎてブラーマンの小屋へ行き、ブラーマンがクラティのために用意した粥を食べた。クラティとその愛人のブラーマンが通常とは転倒した並び方をして座る祭壇の後ろ側から、二人の霊に捧げられたタバコの葉の束を、それがまるで自分のために供えられたものであるかのように無造作に掴み取った。最後にカーリーの神殿に逆回りで現れて、女神に背を向けたまま参拝者たちに手を突き出して、受け取ったバナナをその場で食べた。この年老いたクラティは、書き留めることも演ずることもできないと言われるカーリー＝クラティになっていた。彼女が逆回りに歩いた 20 分の間、クラティの動く身体によってダルマ的秩序はかき消され、

パールヴァティーを支配する夫のシヴァは消え、クラティが現れ、続いてクラティと愛人のブラーマンの逆転した関係が現れた。カーリーの神殿の背後から現れたクラティは、カーリーの非ダルマ的な力を帯びていた。

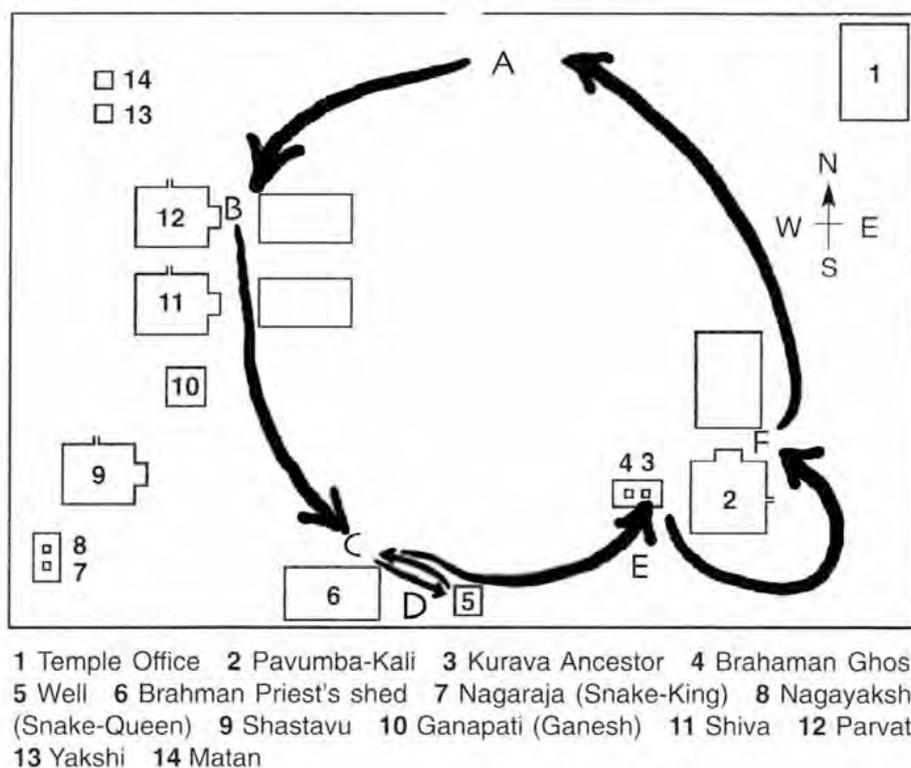


図 2. カランビの反時計回りの歩みが生み出した質の異なる系列

前の年、私は、カランビにカーリーになったクラティの話しを聞こうとしたが、彼女は物語について何も語らなかった。しかし、このカランビの動きは、常識によって見えるものを消して、見えなかった関係を繋いでゆき、低カーストの寺院がサンスクリット化するという単純な発想では考えられない系列を作り出して、観念的なモデルを前提とした（例えばサンスクリット化の）差異の程度の問題ではなく、異なる性質の存在の在り方が表出していた。それは、何かの表象ではなく、持続の中で生成が起きていた [Deleuze 1991; Bergson 1911]。カランビが北門の傍らの菩提樹を取り囲む台座に戻って来て腰を下ろすと、境内にはヒンドゥーの階層化した秩序が再び戻っていた [Uchiyamada 1999]。

## 寺院の扉が閉められた後、外を徘徊するカーリー

2004年7月下旬。私は2000年のモンスーン以来4年ぶりパーヴンヴァに戻って来た。沿岸の聖林と低カーストの祭司で有名な聖地オーチラからオートリキシャに乗って東に向かって走り、様子が変わっていたパーヴンヴァカーリー寺院の北門で降りた。以前はコンクリートの壁の中の境内に、小さな神殿がむき出しで並んでいたが、東側のカーリーの神殿は、クラヴァとブラーマンの対になった霊を祀った祭壇と共に、壁で囲まれていた。シヴァの神殿とパールヴァティーの神殿を含む西側の部分の四方を取り巻くように、破風のついた瓦葺きの屋根と、何百ものランプを壁に取り付けた木製の外壁が特徴的な、17世紀から19世紀に造られたケーララの偉大なヒンドゥー寺院のスタイルを表面的に真似た壁が建設中だった。壁の内側には、東側の壁面いっぱいにバッドゥラカーリー、シヴァ、ヴィシュヌなどの偉大な神々の神話の場面を描いたコンクリート製レリーフが取り付けられていて、職人がエナメルペンキを使ってコンクリートの神々に彩色していた [写真1]。



写真1. ヴェーダ的で正統的な神々のナラティヴを表象するコンクリートのレリーフ

問題は、クラヴァがブラーマンの一族と隣り合わせに住むこの地域に住んでいたといわれる一人のクラティが、ダルマの禁止を犯してシヴァに仕える一人

のブラーマンの祭司と愛し合い、懐妊して、それが（非クラヴァの）パーヴァンヴァの人々の知る所となり、二人が森の中で悲劇的な死を遂げ、その後、この地方に災厄が訪れ、不思議な治癒する力を求めて森に入った二人の女のうちの一人がカーリーに憑依したと伝えられるカーリーの縁起が、今、誰でも知っている常識的、あるいは共通感覚的に一般化したバッドゥラカーリーの物語のヴィジュアルな表象に置き換えられていたことだ。想像上のヴェーダ時代という起源に、カーリーは位置づけられ、何を引き起こすか分からない気まぐれな女性の姿をした力は、持続の内に予想不可能な進化をするのではなく、観念的な起源に固定されようとしていた。



写真 2. カーリーの神殿の入口の上のドゥルガー

カーリーの神殿もコンクリートの壁で四方を取り囲まれて、北側に向いて開かれた入口の上には、まだ彩色されていないアスラを殺すドゥルガーの神像が取り付けられていた。昔この場所でブラーマンの祭司を愛し、今でも同じ情熱を持ち続けていると信じられているクラティが、カーリーとして祀られた神殿の正面は、一旦破壊を始めると世界を破壊し尽くしてしまう可能性をもったカーリーではなく、より気高く、コントロールを失っていないドゥルガーの表象で

飾られている [写真 2] 。

しかし、私には合点がゆかなかった。というのも 1992 年にナーガラージャーナドゥで社会運動に関わっていたパラヤのインフォーマントから、次のような内容の話を聞いていたからだ。

むかし、不可触性の時代、パラヤは穢れのために、日中、道を歩くことが許されなかった。高カーストが道を通るときは、身を隠さなければならなかった。夜になると、パラヤは道に出てきた。パラヤは、ナーヤルの牛小屋を襲ったこともあるだろう。だからパラヤはアスラと呼ばれた。しかし、パラヤはアスラではない。

山の部族のような文化を持つ不可触民のクラヴァの女を、アスラを絶滅させたバッドゥラカーリーあるいはドゥルガーとして表象することに表象の暴力を感じるのは、不可触民から私がこのような話を何度も聞いていたからだ。しかし、カーリーはアスラでもあるし、パールヴァティーはカーリーでもあるという内的差異をもっている点はより重要だ。

こうして改装されて普通のヒンドゥー寺院のようになったこの場所を、寺院の扉が開いている営業時間内に訪れた訪問者は、部族らしい未開の名残が消えた寺院を見て、サンスクリット化している、あるいはヒンドゥー化していると考えよう。表面的にはそのように見えるが、気まぐれで手に負えない情念であり、道徳とは無関係に行動する森の生命のほとぼしりは、ダルマによって飼いならされたのか。クラティだったカーリーは、シヴァの左側に座る、美しく貞淑な妻で母親でもあるパールヴァティーのような属性を獲得し始めているのか。このような空間化した表象を見る限り、そのように解釈することが可能なインデックスを図像学的に見出すことはできる。しかし、私が本稿で試みるのは、表象ではなく、この存在の性質を持続の中で追求することだ。

パーヴンヴァカーリー寺院の扉が閉じられて、鉄製の門に鍵が掛けられる夜 8 時から未明にかけて、カーリーは寺院の外を徘徊する。20 歳代前半の不可触民プラヤの労働者だったスレーシュは、2003 年頃からカーリーが憑依するようになり、その力で悪魔払いをしていた。スレーシュは、尊敬を込めてスワーミーと呼ばれていたが、パーヴンヴァカーリー寺院の委員会の人たちは、スレーシュは偽物ではないかと疑っていた。パーヴンヴァカーリーに縁のあるブラー

マンの一族も、スレーシュは、おそらく偽物だろうと言った。しかし、原因の良くわからない不幸に苦しむ人々が次々に訪れるので、スレーシュスワーミーのアーシュラムでは毎晩のように悪魔払いが行われていた。そこに現れる存在の性質を一つの事例を通して簡単に紹介しておこう。

2004年7月下旬のある日の午後7時過ぎ、私はスレーシュスワーミーのアーシュラムを訪れた。道路を隔てて南側にあるパーヴンヴァカーリー寺院では、夜のプージャーが行われていた。スレーシュの昔の遊び仲間、今はスレーシュのアーシュラムで悪魔払いの手伝いをしている若いプラヤの男たち、スレーシュの父親、母親、弟、妹らが、儀礼の準備をしていた。床絵を書くための色の着いた粉、供物に引き寄せられて訪れる数多くの霊のために、食べ物、酒、ビンロウ、タバコ、それを乗せるためのバナナの葉、花、反物、頭の代わりに捧げられるココナツの実が、数多く、あるいはうずたかく集められていた。昼から準備していたカレーが出来て、庭の地面の上にはバナナの葉が置かれ、ご飯と牛肉のカレーとタピオカのカレーが盛られて行った。通りの反対側を見ると、寺院の門が閉められ、鍵が掛けられ、明かりが消された。スレーシュの家の庭では、見えない来客に夕食が振る舞われた後、集まった人々（イーラヴァの商売人の一家、私、2004年と2005年に私のアシスタントをしたナーヤルの女性ミーナとキリスト教徒の夫ウィニ）に、牛肉のカレーが振る舞われた。ケーララ滞在中は、私は菜食しか食べなかった上、それが受け入れ易い鶏肉やヤギ肉ではなく、牛の肉だったので、私は食べなくなかったが、無理して食べた。美味しいとは思えない食事を終えて、私はイーラヴァの一家と一緒に、スレーシュの家の裏手の滑り易い場所で、手を洗い、口をすすいだ。そこはトイレが無いスレーシュの家族が用を足す場所らしく、人糞と小便の匂いがした。

悪魔払いの準備は時間をかけてゆっくり進んだ。スレーシュの助手たちは色の付いた粉を使って庭の土の上にマンダラを描き始めた〔写真 3, 4〕。早朝に家の前を掃き清め、水を撒き、米の粉でカーラムを素早く巧みに描いてゆくタミルブラーマンの女性たちの仕事に比べると、彼らの仕事はぎこちない仕事だった<sup>6)</sup>。しかし、これは重要な問題ではない。この儀礼で重要なのは、優雅な線を描くことではなく、たくさんの身体と物を使って、動きの中で産出する力の

<sup>6)</sup> その中にいたスレーシュの弟は、2007年に私が調査したマーヴェーリーカラの美術学校の絵画科に2005年に入学したが、1年後には進級できずに退学していた。美術学校で学ぶ絵画とスレーシュのアーシュラムで描いていた床絵は、根本的に性格が異なるものだった。

強烈さを表出させることなのだから。



写真3と4. マンダラを描くスレーシュの助手たち

スレーシュは、赤い絹の布で入口が閉じられたプージャーの部屋の中にいた。プージャーの部屋の外には、カーリーを筆頭に、今晚ここに集う、数多くの神や霊のために、人の頭のように並べられたココナツと反物が置かれ、ココナツの上にはヤシの花が縦に置かれた〔写真5〕。作業が進む庭を挟んで反対側にある屋根の付いた土間には、ビンロウとキンマとタバコの葉、それにプラスチックのコップに入ったヤシ酒が置かれたバナナの葉が並べられた〔写真6〕。



写真5. 頭のように並べられたココナツ



写真6. ビンロウ、キンマ、タバコ、コップ酒

午前2時半頃、マンダラはようやく完成した。供物には様々なものが加えられてゆき、儀礼の中で物の集積が作り出す強烈さが増して行った。3時頃に雨が降り始めた。庭の上にはビニールシートが張られていたので、マンダラが直ち

に濡れることは無かったが、暫くすると水が周囲から庭に流れ込む恐れが出て来た。無数の見えない客のために準備された供物は更に積み重ねられてゆき、色と煙と光と供物の集積に束ねられた感覚の強度は増していった。イーラヴァの一家が、足を伸ばして北を向いて地面に座り、悪魔払いが始まった<sup>7)</sup>。



写真7. どろどろした物質で身体を覆われるイーラヴァの一家

4時少し前、スレーシュは、山の部族から習ったという歌を歌い、小さな鐘を鳴らしながら、手には片方の端を縛ったヤシの葉を持って霊を呼びよせた。バナナの幹をスライスした棒状の端がイーラヴァの頭の上で結ばれ、そのあと結び目が切り落とされた。(チャーヴ・トゥツラルでは、流れを止めている障害を取り除く時にこれが行われる。) これまで時間をかけて作り上げた構造化した秩序のメトニミーらしきものが一気に壊され始めた<sup>8)</sup>。道路の反対側のカーリ

<sup>7)</sup> この座り方は、オリッサの部族ソラのシャーマンが、死者と交流するときの座り方と同じなので、何か関連があるのかもしれない [Vitebsky 1993]。

<sup>8)</sup> 儀礼の過程の二つ目の段階と同じと考えられるが、この三つの段階を再確認するのではなく、二つ目の段階にはっきりと現れる秩序の無い生命の流れのようなものに注目する。

一の神殿の前でやるのと同じように、鶏をイーラヴァの頭の上で時計回りに回した。雨が地面を濡らしはじめたので、スレーシュたちはペースを上げた。イーラヴァの一家の頭の上には、マンダラを地面に描くのに使われたのと同じ粉がまぶされ、神と霊に捧げられたココナツ同様に頭の上にはココナツの花が置かれ、その上から、ココナツの汁、薄めた牛乳などが次々と注がれて、彼らの身体は、産道をくぐり抜ける赤ん坊のようにどろどろしたものに包まれた〔写真7〕。この後、イーラヴァたちは、井戸端へ連れて行かれ、大きなバケツに入った黄色を帯びた白っぽい液体を頭からザーとかけられた。

4時15分。スレーシュが衣裳を変えて出て来た。雨水が庭の中に流れ込んでいる。マンダラの上に樟脳が置かれて火がつけられた。その上をスレーシュが、くるくると回りはじめた。女たちが庭の北側の端に並んで「うるるるるる。うるるるるる。うるるるるる。」と舌を振るわせながら甲高い声で叫んで女神を迎えた。燃え上がるマンダラの上をカーリーになったスレーシュが激しく巡回した〔写真8〕。



写真8. 火がついたマンダラの上を回転するカーリー

カーリーは、でたらめに、凄まじい強度で回転しながら秩序を破壊した。目的に向かって作られていた構造あるいは秩序を持つ構築物は、その制作の合目的な過程が完成で終わる前に破壊されて行った。スレーシュは、よろめいて倒れ、再び起き上がり、よろめきながら回り、マンダラが荒々しく踏みにじられた地面に倒れて動かなくなった。助手たちが駆け寄り、カーリーが抜けた身体を抱き上げて運び去った。

四分間のカーリーの乱舞が終わり、煙が立ちこめるアーシュラムの中庭には破壊された構造物の残骸と、ゴミと化した有機的だったものの残余が散らばっていた。それは激しい流れの痕跡だった。制御されない力が、時間の中で一気に奔流した痕を私たちは見た。私たちは、生の衝動が、空間化された秩序を押し流したのを、持続の中で感覚した。

帰ろうとすると、スレーシュの弟が、スワミーが待てと言っているという。スレーシュは気絶しているのではないようだ。少し経って、私は新聞紙にくるまれたプラサーダムを受け取った。夜が開けている。もうすぐ朝のプージャーが始まる。カーリーは道路を挟んで反対側にあるカーリーの神殿に帰って行ったのだらう。

### クラティとカーリー

東の山脈の向こう側にあるタミル・ナドゥのミナクシ寺院では、朝に祭司が女神を優しく起こし、水浴をさせ、身繕いをして、化粧をして、食事を与えてから朝のプージャーが始まる。一日の最後には、女神を床につかせた後、神殿の扉は翌朝まで閉じられている [Fuller 1984]。これはオーソドックスな神のもてなし方だ。パーヴンヴァのカーリーの神殿では、夜のプージャーが終わり、朝になってブラーマンの祭司が女神を起こしに来るまでの間、カーリーの神殿の扉は閉じられている。朝になるとブラーマンの祭司が、眠っていた女神を起こしにくる。女神は神殿の扉が閉じていた間、スレーシュのアーシュラムにやってくる。肉を食べ、酒を飲み、激しく回転した後、神殿に戻って行った。夢の概念を導入して、カーリーの存在の二重性についてどう考えることができるか、一つの可能性を示しておこう。

中部インドの部族ソラのシャーマンは、目覚めている間は、地上に夫と子供がいる。眠っている間は、地下の世界で別の夫と子供と過ごしている [Vitebsky 1993]。彼女たちは、地上と地下の世界で、二重の生を生きている。パーヴン

ヴァカーリー寺院で一日を過ごし、夜のプージャーの後、家路に付くのではなく、寺院の門に鍵が掛けられた後、スレーシュのアーシュラムで過ごした人は、カーリーが真にカーリーになる時間に、女神の力の働きの一部を垣間みるだろう。カーリーは眠っている間に、別の世界で、別の姿で、異なる性質の存在になっているということもできる。このカーリーの夢に参加することを通して、私たちは無意識の働きの一部を間接的に知ることができるかもしれない。これは計画されたことではない。カランビが2000年頃に亡くなり、その数年後に、カーリーの神殿の周囲と、シヴァとパールヴァティーの神殿の周囲が壁で囲まれた結果、先に挙げたようなカランビの創造的な動きは、それをする人がいなくなっただけでなく、建築的に不可能になった。菩提樹が切り倒された辺りには、寺委員会が管理する賽銭箱が置かれた。賽銭箱には、賽銭が盗まれないようにという理由で鍵が掛けられていた。スレーシュは子供の頃、今アシスタントをしている仲間たちと一緒に賽銭を盗んでいたという。クラヴァの乞食たちがしたような、反構造的で反建築的な動きは不可能になった。しかし、それと同時期に、寺院の北側ではスレーシュが毎晩カーリーになって治療儀礼を始めた。このような展開は誰も予想していなかっただろう。カーリーに関わる力の表現は、このように不確定で予想不可能だ。もう一つ夢に関わる民族誌的なアネクドットを紹介しておこう。

クッティーは亡くなったチャンドランと夢の中で話していた。また、私がナーガラージャナードゥを訪れる度に、その直前に私を夢で見たという。クラヴァにとって夢はリアルな世界だ。マルターがマーヤーであるのと同様に、夢は合目的性を持たない。その性質は、合目的性を持たない生物のそれ、あるいは無意識の働きを意識が理解しようとして翻訳を試みた過程が生み出したものだ。この実在は、確定的なものではなく、また人間主義的なものでもない。それが示しているのは個体が生きている間も、それが死んだ後も、それが有機体として存在する間も、有機体ではなくなった後も、動き奔流する、生の衝動だと考えられないか。

死んだポディアンが、チャーヴ・トゥッラルで語った言葉を引用しておこう。死後7回目の深夜に家に戻って来た死者の霊は、家族や親族が待つ自分の家の前庭に（次女の身体を使って）姿を現した。死者の霊は混乱していた。死者は次のように言った。

なぜこうなんだ、私には分からない、私には分からない、これは幻なのか、それとも呪術なのか、私には分からない、私には分からない。

私が、ポディアンという言葉を用いる理由は、夢の世界からもう一つの夢の世界に出て来たようなポディアンの実在が、不確定な性質を持っているからだ。同様のロジックで考えると、カーリーをダルマに縛り付けておくことはできない。非時間的で理念的な倫理や同じく非時間的で建築的な構造とは無関係な生命の流れがカーリーの本質なのだから。荒々しく生命力を奔流させる神は、死を契機に、すなわち組織を失った時に誕生する。死んだクラティがカーリーになった実在の性質を、空間的に、構造的に、象徴的に、すなわち非時間的かつ非身体的に捉えることは不可能だ。この実在を持続の中で追いかける時、私たちはパーヴンヴァのカーリーと生命の流れの性質を理解するモードの性質、人間中心主義に従属しない生命の質を異にするモードとそのロジックを内側から直感するだろう。ここまで来たら、社会進化論の影を振り切ろう。蜂と蘭の思いがけない共進化の関係に目を止めて、人類学の方法を再考しよう。

## 参考文献

- Bergson, Henri 1911. *Creative Evolution*. New York: Henry Holt & Co.
- Deleuze, Gilles 1991. *Bergsonism*. New York: Zone Books.
- Fuller, C.J. 1984. *Servants of the Goddess: the priests of a South Indian temple*. Cambridge: CUP.
- Hart III, George L. 1975. *The Poems of Ancient Tamil: Their Milieu and their Sanskrit Counterparts*. Berkeley: University of California Press.
- Kafka, Franz 1937. *The Trial*. London: Victor Gollancz.
- Srinivas, M.N. 1952. *Religion and Society Among the Coorgs of South India*. Oxford: Clarendon Press.
- , 1966. *Social Change in Modern India*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- , 1996. The Cohesive Role of Sanskritization. In *Village, Caste, Gender and Method*. Delhi: OUP.
- Uchiyamada, Yasushi 1999. Two Beautiful Untouchable Women. In S. Day, E. Papataxiarchis & M. Steward eds. *Lilies of the Field*. Boulder: Westview.

- . 2002. Projecting textual identities on the forest of Kuravas in Kerala. In Carrin, Marine and Jaffrelot Christoph (eds.) *Tribus et basses castes. Résistance et autonomie dans la société indienne (Purushartha no.23)*. Paris: École des Hautes Études en Sciences Sociales, pp. 111-129.
- 内山田 康 2003. 「開発の二つの記憶」『民族学研究』67(4): 450-477.
- . 2008. 「沈黙する死者」『歴史人類』37: 137-153.
- Vitebsky, Piers 1993. *Dialogues with the Dead: The discussion of mortality among the Sora of eastern India*. Cambridge: CUP.

(2008年12月19日)